

井伏鱒二『川釣り』

片野修

この本を初めて読んだのは高校生の頃で、50年前だった。箱根の早川でハヤやニジマス
を釣っていた私は、溪流釣りの話が多く載っていた『川釣り』を貪るように読んだ覚えがあ
る。

そうは言っても、この本は著者もことわっているように、釣りの技術について解説したも
のではなく、よく釣れた話はひとつもない。著者は有名な作家であるが、文学についての話
もない。例外といえば、大水が出た旅館の同宿者に太宰がいたと書かれている。これが太宰
治をさしているかは不明だが、井伏鱒二と太宰治の間には深いつながりがあった。無名であ
った井伏の『山椒魚』を読んで、中学生の太宰は感激し、その後手紙を送った。それ以来、
太宰が自殺するまで、二人は師弟関係にあった。

結局、この本に書かれているのは、釣りに出かけたときのエピソード、それもひどい目に
遭ったり、失敗したりした話ばかりである。

巻頭の詩「溪流」は次の言葉で始まる。

今日はさっぱり釣れない。

をとりの鮎も

一ぴきころし

一ぴきは逃した

でも釣りたい。……

井伏鱒二の釣りの師匠は佐藤垢石だった。佐藤は雑誌「つり人」の初代編集人であり、エ
ッセイスト、釣りジャーナリストとして川釣りの技術やおもしろさについて多くの著作を
残している。ハヤ、ヤマベからアユにヤマメ、さらにフナ、ボラ、ハゼ、キス、クロダイま
で幅広く解説している。佐藤が1888年生まれ、井伏は10歳年下だった。

著者は佐藤に「釣竿を持つには、先ず邪念があってはいけない。自分は山川草木の一部
であれと念じなくてはならない」と教えられた。伊豆の川で出会った名人には「アユを釣る
にはお前さん、川に喰らひつかなくちゃいけね」と言われた。

しかし、著者は邪念だらけで、川に喰らいつくことができない。「このごろは神経痛も出
てきたし、なるべく足場のよい安全な谷川を選びたい……水につかるのを避けるようにし
たい……」などと書いている。そこで頻繁に出かけたのが伊豆の川であり、温泉に泊まり
ながら、おそらく原稿を書きつつ、釣りを楽しんでいた。

「一昨年あたりから、釣りに行くたびに自分はへたくそになって行くのだと思い知らさ
れている」と書いているが、正直な実感だったのかもしれない。旅館の番頭に「この川、

ヤマメはどのへんで釣れるかね」ときくと「すぐこの下の川で釣れます。もし釣りの上手な人でしたら」と返されて、カチンとくる。川で釣っていると、橋の上に団体旅行の人たちが見物に来て「釣れてるなら、売ってくれないかね」と声をかけられる。著者が知らぬ顔で釣っていると、別の女に「釣れないのよ、きっと。へたくそなのね」と言われてしまう。

神奈川の相模川でアユ釣りをしていると、対岸に佐藤垢石が来た。そこで緊張しながらおとりを泳がすと、すぐにアユが釣れた。慎重にアユを寄せて佐藤に教えられたとおりに取り込んで対岸を見ると、佐藤はこっちを見ていなかった。

寒ブナ釣りに出かけたおりに、友人の五分の一も釣れなくて、「なんて、なさけない人だろう。フナを釣る資格もない。まずシジミでも釣った方がよいだろう」と言われ、細いみぞ川に連れていかれる。そこでヨモギの茎を穴にさしこんでシジミを釣るのだが、こんなことでも著者は楽しんでた。

このほか、川ですべて沈めてあった他人の缶を壊したり、引っかかった仕掛けを取ろうとして膝を強打したりした話は、だれでも似た経験をしたおぼえがあるかもしれない。

後半は二つのショッキングな出来事が描かれている。まず初めに、川で出会った二人の青年に、テグスを忘れたからと言われて、髪の毛を抜かれる話が書かれている。白髪ゆえにテグスにちょうどよいとされ、35本も抜かれてしまったらしい。私は50年前に読んだ、このエピソードを憶えていた。

次は、宿で知り合い、背中を流してもらった青年とその連れの女が、金庫破りの犯人だったという話である。翌日刑事が来て、女を見つけないので、いっしょに捜してくれと頼まれて街を歩き回ることになる。その女の顔を覚えているのが、著者だけだったらしい。せつかくの釣り旅がだいなしになってしまった。

結局、最後までよく釣れた話の一つもなかったが、これは著者の戦略だったかもしれない。釣れた自慢話よりは、失敗談の方が読者を引き付けることを、この老練な作家はわかっていた。そういう視点で見ると、最近の釣り雑誌やSNSは、釣れた話ばかりである。しかし、釣りに行っても釣れない経験は誰でももっているし、近頃では魚はますます減り、環境は悪化しているのだから、もっと釣れない話があってもよいと思う。

いわゆる名人といわれる釣り人は、けっこうしんどいのではないかと思う。この頃は、釣り大会が頻繁に開かれ、そこで結果を出さないと、「なんだ、たいしたことはないな」と言われてしまう。釣りの道具や技術は年々向上する一方で、名人はしだいに年をとり、体力もなくなっていく。アユ釣り名人の歴史を見ても、次々に名人は入れ替わっていく。

「アユを釣るにはお前さん、川に喰らひつかなくちゃいけね」と著者は名人に言われるが、川に喰らいつくためには頻繁に川に出かけ、気迫をもって釣らなくてはならない。それはけっこう大変なことである。その点では、下手でもいい、楽しめればよいと考えた方が気楽であり、それでもよく釣ればうれしさが増すだろう。そんなことを教えられる一冊だった。

井伏鱒二（1952）川釣り。岩波新書